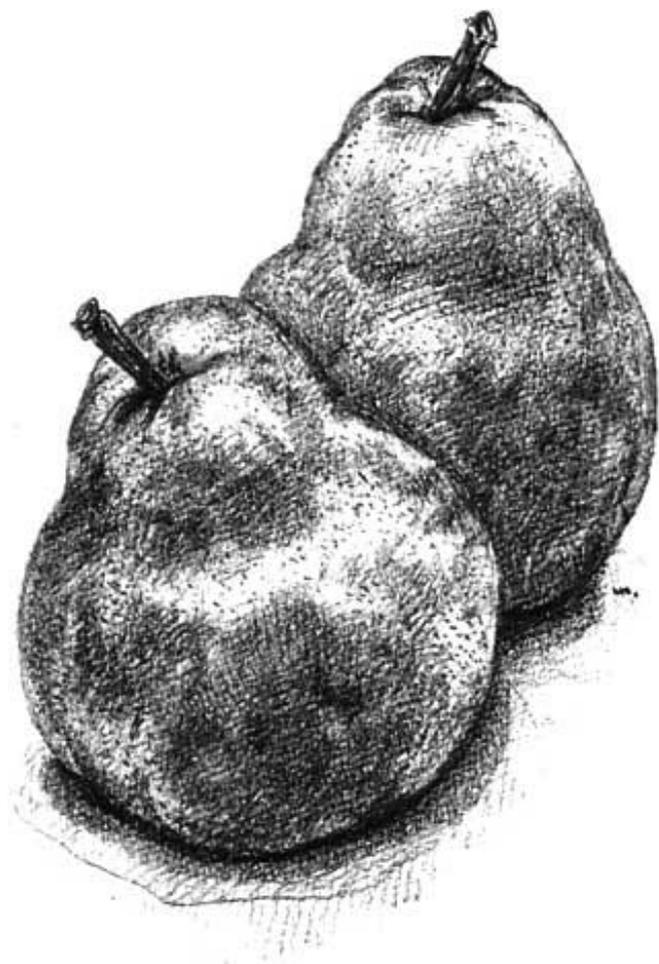


昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成22年4月5日発行(毎月5日1回発行)
第50巻4月号(通巻609号)

風土



4

牡丹の芽

神蔵器

万巻の書庫の余りに露の臺
料峭や血を濃くすると薬飲む
香煙を額にいただき実朝忌
一人にも青色申告蜆汁
長き紐引けば点りて春灯

久女恋ふゆめの中なる白椿

三日月の跳ねて昔の紀元節

悼山下二海先生

先生逝く二月大名ともなりて

むらさきの同行二人西行忌

草萌ゆる路傍の石にほとけさま

天日の金輪際に牡丹の芽

山々のうつらうつらに寝釈迦かな



竹間集

同人作品



冬帽子

田村すゝむ

くれなゐの塔昇りゆく雪蛩
冬晴れや回転ドア人を吐く
寒の雨打つサッカーのロスタイム
釘箱にボルト一本寒土用
翔つものの影走り去る雪の上
人日や小開きにして豆腐店
冬帽子買ってどこにも行かぬ日々

沸騰点

瀬戸

悠

風花に鸚鵡の籠を下げてくる
蒟蒻に隠し庖丁日短か
老いてゆく不可思議海鼠喰つてをり
蹴轆轤の音の単調霜日和
カルメラの沸騰点や去年今年
初春の縄文土器の縄目かな
月光のつばさがみがく雪の山

三寒四温

塩田

博久

墨東を這ひ回りをり冬至の日
晩年や蔵書捨つるも年用意
人日の立て付け悪き戸を直す
さかさまに目白来てをり寒椿
三寒の句を推敲の四温かな
久女忌や大根鼈甲色に煮え
豆腐屋に朝ごとの湯気春隣

探梅行

代田青鳥

雑煮椀

田中佐知子

冬天へ十指一本づつひらく
罅走る素焼の壺やお降りす
メタセコイアの径真直ぐに寒の入り
先頭に任ず行き先探梅行
日矢射して水仙郷の夜明けかな
落語聴く冬座布団を重ねぬて
スイトピーターンテーブルよく回る

大熊野天に注連縄架けにけり
あらたまの滝こだまして熊野かな
あをによし奈良の鹿笛去年今年
大平の鷗尾に日の差す雑煮椀
初旅の記念写真に鹿入り来
買初の小筆の銘は「うたごころ」
鋤きし田に雪の降りこむ七日粥

左義長

関根洋子

年歩む

工藤ミネ子

明けやらぬ空に鳩舞ふ小正月
杳音と歳神様の現れませり
三方に齋火捧げて飾焚く
左義長の煙染めぬる旭かな
寒梅やほのほをあやす風の神
三毬杖の炎の中のほのほかな
白息を正し供物を戴きぬ

鷹止め音なき村となりにけり
凍蝶の合はする翅の黒ごろも
着地やや流されてゐるぼたん雪
戸口より雪押し出す初仕事
吹雪荒れの奥の青空年歩む
杉山を盾とし深雪村三戸
待春や水木の枝のくれなゐに

春を待つ

— 田中佐知子 —

溪流の奥に村あり紙を漉く
崖の雫こほれる冬苺
重石三つ載せて楮の川晒
川底の石すり減らす楮踏み
手炉ひとつ座布団一枚楮削ぐ
雪晴れの山を向かひに紙を干す
見降ろせば湯気の噴き出す楮小屋
氷割つてとろろあふひを掴み出す
卒業証書漉きて黒谷小学校
春を待つところを紙に漉き込んで

山河集

同人作品



神蔵
器選

悴みて指一本のピアノかな

柿沼 盟子

水仙の香のなかにある未来かな
初荷とて折らずに届くゲラの束
日脚伸ぶ風の坂よりバスの来て
円グラフ折線グラフ春隣

根岸 善行

上りきて寒満月となりにけり
去年今年衆生の声の観音経
流れゆく雲の速さの三日かな
七種の包丁のよく切れる音
十本の指の一つが春を待つ

浅田 光代

筆立てにペーパーナイフ去年今年
枯るるなか能面ばかり売つてをり
蓮の骨おのれの影に支へられ

水ぎはに佇てば旅人水仙花
水仙や箱階段の上の闇

池田 光子

筆先へ心音通ふ淑気かな
水仙や子の黒髪に光の輪
人日の影を啄む雀かな
警策の音のひびけり寒椿

堺・山口家

大寒の土間より大黒柱聳つ

内藤 静

まつさをな空に鴟尾たつ飾壳
初芝居大序の幕のあがりけり
息白く命名の子を抱きに行く
臘梅や汀女の声がテレビより
一幡と千幡の間寒椿

◇特別作品◇(抄)

早春賦

森田 節子

扁額の「梅檀林」や冬の空
比翼塚に影の揺るるや冬ざくら
青桐の根瘤に幣や霜柱
蘭学者洪庵墓所や笹子鳴く
神輿庫の旧町名や返り花
「鷹匠組」の碑ひそと竜の玉
日脚伸ぶ日光將軍御成道
水温む娘が弟子入りの桶屋かな
許し得て校門くぐる冬木の芽
クロツカス咲ける母校に「早春賦」

風土独語／神蔵器



雪の降る隣の部屋の畳かな

根岸 善行

この句につき当たった時、私は句集『草虱』で平成十六年第
三十八回蛇笏賞を受賞した福田甲子雄さんの

生誕も死も花冷えの寝間ひとつ

を思い出していた。これは福田甲子雄自身の生活実体験を通
して体内に重く積み重ねられ受け止められ消えることのない
実感、一種の悟りであろうが、同時にこの世に生を得たもの
の逃れることの出来ない共通の運命でもある。

作者善行さんの隣の部屋の畳は、善行さんの生涯、誕生か
ら喜びも悲しみも見て来ており、その畳は善行さんの喜びの
涙も汗も沁み込んでいるだろう。春の雪は静かに一つ一つが
花片のように照り映えて畳の隅々まで明るく見せている。そ
してこの馴れ親しんで来た畳は過去と同時に残された未来へ
の夢を与えてくれる。畳から畳へ、幸せは案外手近にあるも
のだ。

冬の川一両列車写しけり

島 玲子

あらためて説明も解説も要しない単純澄明な句である。表
現技巧など棄てて、自らの眼を信じ、自らの感覚を通して白
然の精気を吸収し、自然と同化して来ている。

あえて蛇足を加えれば、作者は徳島県阿南の人、近くに那
賀川、桑野川がほぼ平行して太平洋は紀伊水道の海へ注ぎ、
徳島から高知方面へただ一本のローカル線牟岐線が走ってい
る。牟岐線に乗車すれば、那賀川を超えるあたりは左に海を
眺め、右に山が迫っている。風光は明媚だが、冬の川は極度
に水量が減り、すき透るように水底まで澄んで流れている。
作者の乗った一両電車の影が、ほんの一瞬水に写って消えた。
ふくよかな人懐かしさをのこして……。

着膨れの妻にも会釈したりけり

竹生田勝次

一と口に、貧しい頃から共に苦労を重ねて来た妻を「糟糠
の妻」などと言われる。余計なことだが何時ものわるい癖
で「糟糠」だけを見てみると、幾つかの辞書に使い方の例と
して「清盛入道は平氏の糟糠、武家の塵芥なり」（平家物語）
と書かれていた。

これは保元の乱のあと平治の乱に義朝を討ち破って平氏の
天下になる以前のこと、特に清盛は父忠盛の子ではなく白河
法皇が寵愛した祇園女御との間の子、つまり法皇の落胤とい
う。また清盛の母は祇園女御の妹で、清盛が三歳の時に亡く
なったので、清盛からすれば叔母に当る帆園女御の養子と
なって成長したとも伝えられている。いずれにしても清盛は
出生の秘密から若い頃は苛酷な運命に辛酸な日々であったか
も知れない。しかし、私たちが「糟糠」という言葉とは次元
が違うようである。

作者の結婚はおそらく終戦直後、一億総耐乏生活の真っ只
中であつた。明るい希望に輝く出発であつたが、苦勞の多い
人生であつた。「ありがとう」、一言いいたいのだが、男の含
羞、ただ黙って頭を下げた。（以下略）

風土集



神蔵器選

天の警戸よりの歳月初山河

上尾

根岸 善行

両牖に届きて寒に入りにつけり

雪の降る隣の部屋の畳かな

鴨の来て総翔ちの寒雀

寛げばガラス戸の部屋口脚伸ば

冬の川一両列車写しけり

阿南

島 玲子

東の間の日差し大事に干大根

朝夕の風の切れ味野水仙

冬草の牧にすべりし蹄跡

蓮根の穴数へをり日脚伸ば

日向ぼこ禰宜は箒を垣に立て

さいたま

竹生田勝次

着膨れの妻にも会釈したりけり

元朝の普段の顔を洗ひけり

ペンギンの如く待ちをり初日の出

猿山の猿の逃げ出す四温かな

風花を掌に受くごとく学びたし

川崎

豎山 道助

倫敦を時計回りに漱石忌

今落ちし木の葉髪まだ我のもの

乞食の鉢に入りたる冬の蝶

も一つの己の背に冬日射す

成人式道いつばいに集ひくる

川崎

井月 光石

西伊豆

大白鳥翔つや洋上富士聳てり

碧空へ凍てつく山嶺蛇笏の地

歯ざしりをして魴鮒の釣られけり

柑太き土産物屋の大囲炉裏

スペインのマイナス四度の標に佇つ

大分

工藤はるみ

ピカソ展出てより冬の街歩く

冬の雨目的地まで道迷ふ

スペインの新幹線の冬景色

旅終へて臘梅のよき香りかな